銀色の線路

澁川驍

青桐書房

銀色の線路

発　行　一九八七年一〇月二〇日　初版
著　者　澁川驍
発行者　山﨑武雄
発行所　青桐書房
一六六東京都杉並区成田東五―一二―一六
電話（〇三）三九三―三七七三
発売元　星雲社
一一二東京都文京区小石川五―一九―二五
電話（〇三）九四七―一〇二一
印刷所　精興社
定　価　二〇〇〇円

© Gyo Shibukawa 1987 Printed in Japan
ISBN 4-7952-8003-7

目

次

妻 7
秋冷え 45
朝焼 69
春寒 129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風明り　169
大阪駅　215
銀色の線路　237
猫と栗の花　271

短篇集

銀色の線路

妻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

宵の口に電燈が停電で消えてしまって、ローソクをつけて起きているのももったいない気がしたので、大沢夫婦は八時ごろから寝床についていた。しばらくとりとめのないことを話し、それがとぎれて、大沢利明が少し睡気がさしてきた頃、突然階下の奥さんが階段の下で来客のあることを知らせる声がした。すぐそれに妻の照子が答えることと思っていると、案外もう彼女は寝入りこんでいるらしく、その声が耳にはいらないような様子だった。それで利明は黙っているわけにいかず、追っかけるように返事して、すぐ下へ降りて行くむねを答えた。

「どうしたの。」とその声に照子がやっと目が覚めたらしく、暗闇のなかで声を出した。

「お客さんだそうだから、ちょっと玄関に出て行ってみてくれ。」

「いやですよ。あんたいってらっしゃいよ。わたしは寝まきを着ているんだもの。その間に蚊帳ぐらい取りはずして置かなくちゃ。」

「じゃ、早くローソクをつけてくれよ。」彼はすぐに蚊帳の外に跳び出た。すると、ちょうど省線電車の通る音がして、家が地震のように揺れはじめた。それで彼は思わずガラスを眺めると、近くの闇空を青い電気の火花が弾けながら走って行くのが目に映った。

間もなく照子のさしだすローソクを持って、玄関のほうへ降りて行った。するとそこの土間にずっと前二度遊びにきたことのある鈴木政雄が立っていた。雨のなかを走ってきたらしく、紺サージの洋服に水滴がいっぱいたかっていて、それがゆらめくローソクの光をうけて、キラキラしていた。

「先生。どうもこんなに遅くお伺いして。」と鈴木は恐縮したようになんども頭をさげた。「ちょっとお願いしたいことがあったもんですから。」

「じゃ、まあお上んなさい。」

利明はN大学で哲学の講師をしていた。しかしそれだけでは生計をたてることができないので、いまはS美術学校で美学を、またT女子専門学校で英語の授業を掛けもっていた。鈴木政雄はN大学で自分の講義を熱心に聞いていた男だった。学生時分に一度遊びにきたことがあり、その後戦争で召集されて、フィリッピンに行き、終戦の翌年に日本にもどってきた。しばらく故郷の青森県で新聞記者をやり、間もなく上京してきて、ある青年向きの綜合雑誌の編輯記者

をしているということだった。
二人が上って行くと、照子はすでに不断着の黄色いワンピースに着かえ、蚊帳をかたづけて、蒲団を部屋の隅に丸めていた。
「まあ、雨に濡れていらっしゃったんですね。」と照子はすぐ鈴木の洋服に気がついていった。「早くおぬぎなさいな。」彼女は鈴木がすまなそうにいう言葉を弾き返すようにして、たちまち彼の洋服を受けとり、それを籐の洋服がけに通しながら、「ズボンはタオルでおふきなさいな。あなた。そこのタオルを取ってあげなさいよ。」
ようやく大沢と鈴木はローソクの火をまんなかにしたチャブ台に向いあって坐った。その姿がいずれもうしろに大きな影法師となって壁と襖にはためいていた。
「どうかしたんじゃないですか。」と大沢はなにかいつもと違った感じがしたのでたずねた。
「いや、あの、実は私は一月ほど前に、借りていた部屋を追いだされてしまったのです。だいぶ頑張っていたんですけど、とうとうだめになったんです。もっともその部屋も友人が大阪に転任になったあとを、その友人の世話で新しい部屋を見つけるまで一月という約束ではいったのですが、それから半年ほどいたんですから、相当頑張ったわけです。ところが、しまいにあとを借りたという男が、私の留守にはいってきて、私の荷物を廊下に放りだしているんです。

それでひどい喧嘩をやったんですが、町の顔役みたいな奴が仲裁にはいったりして、どうしてもそこを出て行かなけりゃならない始末になったのです。といっていまのような住宅地獄の世の中にあとの部屋が見つかるわけがありません。それからずっと部屋なし犬なんです。といってもさすがに上野の地下道にもぐりこむ気はしません。それでしかたなく人の迷惑になると思いながらも、二人の友人の下宿先を代りばんこに泊るだけ泊めてもらっているのです。ところが今夜は残念なことにこの二人のうちがどちらも具合が悪いのです。一人は父親が商用で上京して同宿しているし、一人はいま大阪に出張していて、そのうちのおかみさんが私を嫌っているものですから、人のいない部屋に私を泊めるわけにはいかないといって上にあげてくれないのです。それで今夜はとうとう行きどころがなくなってしまったのです。もっともどこかの駅で夜明しでもすればいいのですが、それじゃうっかり浮浪者にでもなりそうでいやなんです。それでいろいろ考えあぐねた結果、先生にお迷惑でも一晩部屋の隅に寝かしていただけないかと思ってお願いにあがったわけです。」鈴木は首をうなだれて、畏っていた。その眉毛の濃い、頬骨の角ばった、色白い顔がその悩みでいかにも憔悴しているような表情を見せている。

「泊るところがないのかね。そりゃたいへんだ。照子、いいだろう。」大沢はすでに鈴木の言葉を承諾したつもりだったが、妻の考えに気をかねて、うしろをふりかえった。

「まあ、気の毒ですわね。狭いところですが、三畳の部屋に床を取りましょう。いろいろ台所道具が置いてあって、寝にくいけど、この六畳じゃなおさら窮屈だし……」といつも文句の多い照子も今日は強く鈴木の境遇に同情しているふうだった。

「ほんとにすみません。これで助かりました。寝かしてだけいただければそれでいいんですから。食事は外食券を持っていますから、朝食堂へ行ってたべます。そのことはどうか心配しないでください。」と鈴木はいかにも安堵したように顔をあげて、淋しそうな微笑を浮べた。

「そう決まればすぐ寝る必要もなかろうから、しばらく話をしよう。」といいながら彼は人を泊めるとなると、その食事のことも考えなければならないといくらか重いものを感じた。しかしいつも食糧のことを気にしている照子が、いま少しもいやな顔を見せなかったのは幸いだと思った。しかしこれが果して今日一夜だけで終わるだろうか。それもつづいて彼に重たいものを漠然と投げ与えてくるのだった。

その翌朝大沢も照子も朝の食事をいっしょにするつもりだったが、鈴木はそれを執拗に断って、顔を洗うとすぐ外へ跳び出していってしまった。昨夜食事の心配はしてくれるなといっていたが、どうせすすめればうわべだけ恐縮しながらそれにしたがうものとばかり思っていたの

に、この行動は二人に取ってちょっと意外だった。それだけに彼の態度は気持のいい印象を与えた。もちろんこの朝もし困ったことがあったらまたいらっしゃいとその場の義理合いからお世辞をいったが、まさか先生であった自分のところにそう頻繁に泊りにくることはあるまいと大沢は思っていた。たしかにそれから四五日鈴木は姿を見せなかった。ところが六日目の夜に、鈴木がこの前よりも一層目を窪ませてやってきた。様子を聞くと、あれから二三日やっと無理に大阪に出張している友人の留守部屋に二日泊ったところ、幸い友人が三日目の朝帰宅したが、かえってそこのおかみさんとの間がいっそうこじれて、つづけて泊るわけにはいかず、しかたなくこの二日は雑誌社の事務所に椅子をならべてその上で夜を明かしたが、安眠はできず、しかも今朝ビルの管理人にそれを見つけられ、そんなことをされたらもし事故が起ったら、みんなあんたのせいにされるがそれでもよいかと嫌味をいわれたので、もうそれもできず、いよいよ困りぬいて、ここへやってきたのだという。しかしもう一方の友人は父親が明日国に帰るはずになっているから、明晩からはそちらに泊れると思うから、今夜一晩だけお願いするというのだった。いかにも難渋している様子が目に見えるようだったので、大沢の同情はいっそう強くなり、鈴木の望みを異論なく承諾したのみならず、そういう状態ならもっと遠慮せずやってこいという義侠的な親切心を言葉に出させたりした。それにだいぶ安心したらしく鈴木はそれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com